

奈良県
大型構造物長寿命化修繕計画
(個別施設計画)

令和7年10月
奈良県 県土マネジメント部
道路マネジメント課

1. これまでの点検、修繕実績

平成 26 年度に 5 年に 1 度の点検が義務化され、これまでに 1・2 巡目点検が完了し、令和 6 年度から 3 巡目点検を実施している。1・2 巡目の点検結果と修繕実績は下表のとおりである。

表 1. 1・2 巡目の点検結果

| 期間 | 施設数 | 判定区分内訳 | | | |
|-----------------|-----|-----------|----------------|-----------------|----------------|
| | | I [健全] | II [予防保全段階] | III [早期措置段階] | IV [緊急措置段階] |
| 1 巡目 H26～H30 | 121 | 12 (9.9%) | 71 (58.7%) | 38 (31.4%) | 0 (0.0%) |
| 2 巡目 R1～R5 | 119 | 3 (2.5%) | 65 (54.6%) | 51 (42.9%) | 0 (0.0%) |

表 2. 1・2 巡目Ⅲ・Ⅳ判定施設の修繕実績（令和 6 年度末時点）

| 期間 | Ⅲ・Ⅳ判定施設数 | 修繕着手済施設数 | 措置完了済施設数 |
|-----------------|----------|-------------|-------------|
| 1 巡目 H26～H30 | 38 | 38 (100.0%) | 38 (100.0%) |
| 2 巡目 R1～R5 | 51 | 50 (98.0%) | 45 (88.2%) |

Ⅲ判定の数は、1 巡目で 38 施設、2 巡目で 51 施設であり増加している。2 巡目Ⅲ判定の 51 施設の内訳を整理すると、

- ① 1 巡目でⅠ判定またはⅡ判定だった橋梁がⅢ判定へ遷移した数は 24 橋
- ② 1 巡目でⅢ判定で 2 巡目点検時に修繕が完了していたが再度Ⅲ判定となった数は 7 橋
- ③ 1 巡目でⅢ判定であり 2 巡目点検時に修繕が未完了の数は 21 橋

となっており、②③で半数以上を占める。この②③の多さが、Ⅲ判定橋梁を増加させている。

②について、当初はⅢ判定の損傷のみを修繕する方針としていたことが原因と考えられる。近年においては、足場を流用するなどしながら、合理的にⅡ判定の損傷も修繕する方針としていることから、3 巡目点検時には減少するものと想定される。

③について、下図のとおり令和 2 年度を境に年間修繕完了数が大きく異なり、2 巡目Ⅲ判定施設については、その多くで次回点検時までには修繕が完了している。したがって、②同様に③についても 3 巡目点検時には減少するものと想定される。

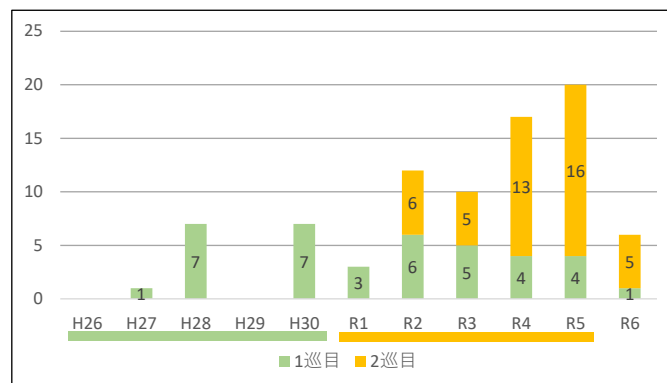


図 1. 年度毎の修繕完了数

このように、本県はこれまで、点検結果に基づく計画的な修繕を強力に推進しており、令和 6 年度時点で 1 巡目Ⅲ判定 38 施設の修繕が完了しており、2 巡目Ⅲ判定 51 施設の修繕も 45 施設完了している。

前述のとおり、3 巡目にⅢ判定となる施設は減少するものと想定され、今後はⅢ判定施設だけでなく、Ⅱ判定施設の修繕にも取り組んでいくことで、ライフサイクルコストの低減や効率的かつ持続可能な維持管理を実現する予防保全によるメンテナンスへの移行が実現可能となってきた。

2. 老朽化対策における基本方針

ライフサイクルコストの低減や効率的かつ持続可能な維持管理を実現する予防保全によるメンテナンスの実現に向けて、早期措置段階であるⅢ判定施設が依然として多い現状を踏まえ、引き続きⅢ判定施設に対する修繕に取り組む。なお、修繕にあたっては、撤去を選択肢とすることが、一時的な負担が生じたとしても、長期的な視点で見た際には有効な手段となりうることから、施設利用者数や通学路の有無、地元の意向などを踏まえ、必要性が有ると判断できる場合に限り修繕を行い、必要性が無いと判断できる場合は撤去する方針とする。

① 対象施設

対象施設は、別紙に記載の奈良県管理の橋梁とする。

② 計画期間

計画期間は令和 10 年度までとする。

③ 対策の優先度の考え方

優先順位 1 健全性の診断の区分「Ⅲ」

全ての施設を対象に、次回点検までに修繕を完了させる。

優先順位 2 健全性の診断の区分「Ⅱ」

施設重要度や予算等を踏まえ、計画的に修繕を実施する。

④ 個別施設の状態、対策内容と実施時期、対策費用

別紙 1 の通りとする。

3. 新技術の活用方針

[点検業務]

点検支援技術性能カタログ等を参考に、全施設でコスト削減や事業効率化のための新技術活用に向けた検討を行う。

[補修工事]

設計段階から新技術情報提供システム（NETIS）等を参考に、全施設で新技術活用を含めた比較検討を行い、コスト縮減に努める。

4. 費用の縮減に関する具体的な方針

[新技術の活用－横断歩道橋－]

3 巡目点検（R6～R10）においては、河川を跨ぐ径間を持つ横断歩道橋 6 施設を対象にドローンを活用した点検を実施し、従来技術を活用した場合と比較して 3 百万程度のコスト

縮減を目指す。

[新技術の活用－大型カルバート・ロックシェッド－]

点検、工事において新技術を使用し、作業の省略化、時間短縮を図る。管理施設のうち 3 割程度で新技術を活用し、3 巡目点検（R6～R10）において 5 百万程度の費用削減を目指す。

[新技術の活用－門型標識－]

点検、工事において新技術を使用し、作業の省略化、時間短縮を図る。管理施設のうち 3 割程度で新技術を活用し、3 巡目点検（R6～R10）において 3 百万程度の費用削減を目指す。

[施設の集約化・撤去－横断歩道橋－]

管理施設数削減の取組として、平成 26 年度から令和 6 年度の間、横断歩道橋において老朽化による単純撤去を 2 施設で実施しており、維持管理・点検費として約 2.3 百万円 / 5 ヶ年のコスト縮減効果を得られた。

今後についても、道路施設の利用状況等を調査し、集約化・撤去などによる管理施設数削減に向けて、令和 7 年度から令和 10 年度までに横断歩道橋 1 施設の管理施設削減を実施し、当該施設の同期間内に必要となる維持管理・点検費 1 百万円程度のコスト縮減を目指す。

[施設の集約化・撤去－大型カルバート・ロックシェッド－]

県が管理する大型カルバート・ロックシェッドについては利用者が多く、現状、施設の集約化・撤去は困難である。今後、バイパス整備等により、利用状況が変化した場合には、集約化・撤去の検討を行うこととする。

[施設の集約化・撤去－門型標識－]

県が管理する門型標識が設置されている路線については交通量が多く、現状、施設の集約化・撤去は困難である。今後、バイパス整備等により、利用状況が変化した場合には、集約化・撤去の検討を行うこととする。

5. 市町村支援の取組方針

[奈良モデルによる市町村支援]

県が一括発注する「垂直補完」と、近接する市町村が共同で発注する「水平補完」を組み合わせることで、効率的なメンテナンス事業の実施を図る。

「垂直補完」では長寿命化修繕計画の策定業務、定期点検業務、補修設計業務・工事を対象とする。

[奈良県道路メンテナンス会議による研修会の開催]

道路メンテナンスに関する研修会の開催を年 2 回程度開催し、技術力の向上を図る。

[今後の展望]

市町村支援を引き続き推進し、市町村自らがメンテナンスサイクルを回し、道路施設の維持管理、老朽化対策を適切に実施、継続できる体制の構築を目指す。

